

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	村津 蘭
論文題目	ベナンの霊的世界の変容をめぐる人類学的考察 —悪魔と対峙する新宗教を事例として—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、アフリカ・ベナン共和国に出現した新宗教「イエス・キリストの大聖教会 バナメーミッション (以下「バナメー教会」)」をめぐる現われる、霊的存在と人々とのかかわりについて考察したものである。</p> <p>まず序章では、呪術・妖術研究に関する災因論的説明、機能主義的説明、象徴的抵抗論といった先行研究が紹介される。バナメー教会は、悪魔払いや祈禱を重視する、いわゆる「ペンテコステ的教会」に分類されるが、その宗教実践を分析するには、先行研究の分析枠組みでは不十分であることが論じられる。そこで提示されるのが、本論文の中心となる、実践・身体・情動といった視座である。</p> <p>第1章では、ベナンの宗教的状況が整理される。当地域の在来宗教は、呪物を用い祖先霊や多数の神格を崇拝するヴォドゥンであるが、近年、民主化により宗教が多様化し、ペンテコステ的教会が急速に増加してきた。その背景には、従来のキリスト教系教会のモラルが低下し、呪術・妖術に対抗する力を持たないと信じられていることがあることが示される。</p> <p>第2章では、バナメー教会に関する記述がなされる。カトリックに起源を持つ当教会は、2009年に少女パーフェットに「神」が降臨したことで始まった。それ以後、他宗派を「悪魔・妖術師である」として攻撃するといった過激な教義によって勢力を伸ばしている。</p> <p>第3章では、バナメー教会における病気治療の過程が分析される。教会の信者は大半が女性であり、信仰を始めた理由は、病苦や家族関係のもつれなどが多い。そういった苦難の原因は、呪術と深く関連していることが確認される。そして、病気の治療過程では、信者の「情動の揺さぶり」が大きな作用を果たしていることが示される。</p> <p>第4章では、バナメー教会の重要な身体実践であるデリヴァランス (deliverance; 解放) の様子が詳細に記述される。「解放」の標的となるのは、信者に憑依した霊的存在であるが、それらはヴォドゥン信仰における「マミワタ」霊などだけでなく、従来は人に憑依する存在ではなかったはずの妖術師霊であることも多い。</p> <p>第5章では、デリヴァランスの中での憑依の状況が具体的に記述される。治療の過程では、治療者に接手された信者は、霊に憑依されて倒れることが多いが、そういった定型的な身体経験は、一種のスキルとして信者の中で育ち、身体化されていく。</p> <p>第6章では、バナメー教会信者の多くが信仰の理由として挙げる、「病が治癒した」</p>			

という経験が分析される。まず、ベナンにおける生物医療と病の観念が整理された後、バナー教会における治癒が、信者の身体感覚が教会の提供する数多くのモノや環境に媒介されて揺さぶられることによって起こっている状況が示される。

第7章は、ある信者の家族において生じた、妖術師の憑依に関する短編映画が充てられている。憑依の状況を視覚的・聴覚的に示すことにより、言語化未満の「情動」が、映像という形で感覚的な民族誌として提示されている。

終章では、ここまでの記述・分析を踏まえ、ベナンにおける宗教的世界の現状について議論されている。都市化・個人化・宗教の多様化といった現代の状況に対して無力な既存宗教への失望が、バナー教会の隆盛につながった。バナー教会には、病を得た信者の情動に強く働きかけ、その感覚を身体の外へ向けさせることによって病を治癒させるというプロセスが存在した。この過程において、妖術師という存在は、注意を外へ向けるという意味で、邪悪なものというよりはむしろ「病を治す」存在として捉えられるということが示唆された。